

## 【高等学校の部・最優秀賞】

### 生命の継承

沖縄県立糸満高等学校

三年 糸数 昌朝

東北地方は三月十一日の未曾有の地震と津波に襲われた。私は夜のニュースで知った。瓦礫の山におおわれ、倒壊した家屋。大自然の大きな力が人工の建物を打ちくだく映像に「まるで戦争の後みたいだ。」つぶやいた。私に母が「沖縄での戦争は違う。人間が人間でなくなった結果である。」と語った。沖縄に梅雨入が告げられると、六月二十三日の慰霊の日が近いことを県民は感じる。沖縄はもちろん、日本にとつても重大な意味を持つ日の事を戦争を知らない世代の我々は、受け止めているのだろうかと考える。

約二十万人の命を奪った沖縄戦から六十六年が経過した。平成に生まれた私は、小学校の頃より平和教育を受けて、慰霊の日が近づくと戦争体験者の方々の話を聞いた。女生が負傷した兵士の世話をする姿や、壕の中の恐ろしい出来事を聞いた。当時の私は沖縄で実際に起こったこととは感じられずに、語り部の女性の話しを昔話のように感じていた。高校生になって平和ウォークラリーで、戦争戦跡廻りを行い、平和について考える授業がある。戦跡や沖縄戦について事前の学習を行う。轟の壕や私の住む八重瀬公園の近くの白梅の塔、ひめゆりの塔を説明書を読みながらグループでまわった。摩文仁にある健児の塔の三人の男子学生の祈りの像には衝撃を受けた。友情師弟愛、永遠の平和を祈る姿に。今まで学徒動員された女子学生についてはテレビや資料等でよく目にしてきた。県内の女子校から約六百名が戦場に動員され、三

二三名の女生徒が戦死した。昭和二十年一月には、学業が中断されて十五〜十九才の男子生徒一七八〇名が鉄血勤皇隊の戦闘要員として編成され、戦場へと動員された。軍命を伝える伝令や、爆雷を背負って斬込を命令され、兵隊と同じ任務に就いた。動員された生徒の中から八九〇名の若い命が失われた。自分と同じ年齢の学生が部活や楽しい学園生活を捨てさせられ、地獄の戦場へ向かった事に強い怒りを感じた。資料の中に「学校側の軍に対して十四〜十六才の動員される生徒の名簿を提出し軍への積極的な協力をした。」とあった。教育の重要性を感じた。私は今までの平和学習に対する考え方の甘さ、知ろうとしない自分に対して恥ずかしく思った。二度と未来ある生命が戦争で失われないうちにこれから自分が何をすべきかと考え、一般住民を巻き込んだ沖縄戦の実相を知る為に資料館に行った。

平和学習に居合わせた県外の生徒は、戦死した人の遺品を目の前に「他に見る物は無いの？」等、戦場の写真を見てまるでお化け屋敷の中のように、笑い、叫び声を上げて走り去った。戦争を知らない世代の若者の戦争に対する意識、平和に対する概念が薄れてきている事を強く感じた。そして、祖父が戦争中の出来事を語った事を思い出した。国民学校の一年生だった祖父は、目の前の人が粉々に死んでいき、側を走っている人々が次々と倒れ死んでいる中を逃げた。ただこの地獄から逃げたいと走った。二度とこのような戦をしてはいけない。「命は宝である。」と繰り返し話していた。

かけがえない命。世界の各地ではその命が失われるような戦争が続いている。醜い人間のエゴから生まれる戦争。考え方、宗教観

の違いから生まれる戦争。戦争からは何も生まれない。地球上の生物で最も賢いと言われる人間。その人間は戦争を止めることは出来ないのだろうか。戦争を止める方法の一つ、私たちが「戦争はいけない。」と声に出し、世界の国々と対話することが第一歩である。

私と同じような、友情や、教師になる夢を持ち、学業途中で戦死した学生に思いを重ねながら、今の沖縄の状況を考えた。中部の学校では、隣の基地からの軍用機の爆音の為勉強が中断されている。大学構内にはヘリコプターが墜落し、炎上した。住民地域に落下傘が舞い降り、住民の人々を怖がらせた。この小さな島に日本全体にあるアメリカ軍専用施設の七五%が集中している。私達は不条理の中で生きている。今、基地の移転で北部の村に住む村人の中に対立が生じている。今の沖縄は私達高校生が安心して勉強する教育現場にはほど遠いと言わねばならない。私達高校生も卒業して社会人として、沖縄の将来を形成する。「歴史に学ばなければ前進はない」というように、負の遺産である沖縄戦の実相をよく理解し、戦争の愚かさを学ばなければならぬ。沖縄から戦争につながる基地をなくしていかなければならない。ハイテクの時代でも戦争は人間と人間が殺し合い、人間の命を奪ってしまうものだから、人間が豊かに自由に平和に暮らしていく為に一人一人が平和を願い、意識をもち行動することが大切であると私は考える。沖縄の若者が再び戦場で未来ある命を失わない為に。